

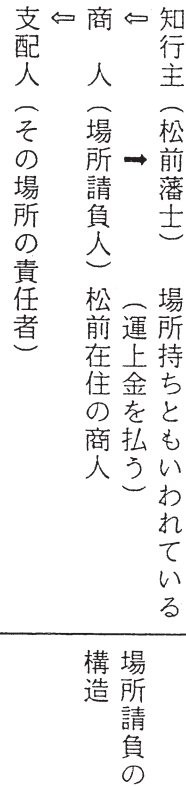
せなかむし

発行・古平町史編纂委員会
編纂・古平町史編纂室
第二十五号(一日発行)
平成三年十月一日

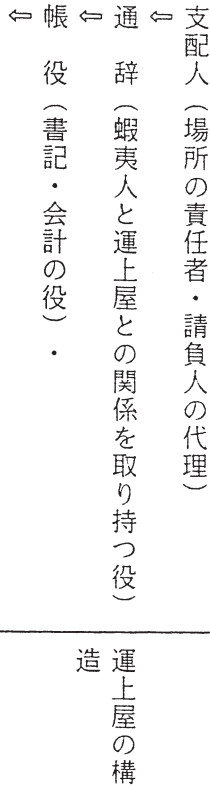
明治初期・古平場所の 様子と行政の始まり

近 藤 芳 一

場所請負の構造は、一般的に一次のように整理されている。

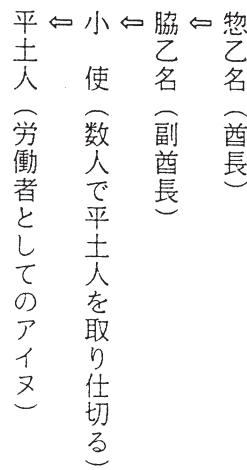


このような関係になっていて、支配人は古平場所の場合は時期になると運上屋に居住していたようである。時代が進むにつれて「運上屋の組織」も形式化されてきたようである。



一番人 (帳役の補佐、蝦夷人の監督使役)

場所では、アイヌを労働力と一組織されていた。して確保するために、アイヌも



蝦夷人の支配構造

以上のように、縦の系列を重視した支配体制によって、蝦夷一人(アイヌ)たちは徹底的に搾取されたのである。



明治八年・《開拓使日誌》より
古平郡海浜デ溺死人ノ儀上申

港の設備も無く、手漕ぎや帆船の海難事故は多かった。古平でも、一夜で二十数隻の帆船が遭難した記録もある。

【後志国古平郡ノ海浜デ鯨ヲ

漁獲シテイタトコロ、五月十八日午前五時ゴロ暴風雨がニワカニ西北ヨリ起リ、激浪ノタメ数百ノ漁船ガ一時ニ漂流シ、極メテ危険ナ状態ニナッタノデ直チ

ニ救助ニ努メタ。シカシ突然ノコトデモアリ、ツイ二十三人ノ溺死者ヲ出入結果トナツテシマッタ。ソノ外漁具ノ被害モ甚大デアッタ。札幌本庁ヨリ申シ越シノアツタコトニツイテ、以上ノ通りゴ報告ヲイタシマス。」
(これは、文体を改めて要約したものです)

終戦——戦地から帰る

国破れて山河あり

よく晴れた日には、すぐ目の前の対岸に増毛の山々がきれいに映り、すんだ空にはかもめが飛び交え、海の碧さも昔のままである。

「変わらない、いい景色だなあ——」と、つくづく思う。左に丸山岬、右にはシリバ、そして、そそり立つ岩肌と小樽



の山々が重なっていて、セタカムイがかっこう良く中景をひきしめている。天に突き出たローソク岩の配置がまたいい。私は、ノモンハンから生きて帰って来た時に、この景色を眺めてどんなに感動したことが。空気の磯臭さ、これが『ふるさと』なんだと実感した。母がいて、兄、妹がいて、顔

見知りの故郷の人たちがいた。みんなが喜んでくれた。母は早速お汁粉を作ってくれた。そして、誰々さんが亡くなったとか、鉾石積みみの船が空襲で沈没したとか……。しかし、その母も仏になってもう何年経ったんだらう。ふと、そんな昔のことが私の頭を横切り、こんなことを書いてみた。

ともあれ、『ふるさと』なんて意識するのは、そんなに度々あるものではない。呼吸していても空気のあることを忘れてしま

って、なんとも思っていないよなものだらう。「故郷は遠くにありて思うもの」とは、まさに至言である。この年になって心配なのは、平和ぼけ？ 懐古ぼけ？ だがぼけてばかりもいられない。古平でも水田減反、一家での転出や出稼ぎなどと、若者の働く場所がないので人口の流出が

見られるが、この過疎化がいつまで続くのか空恐ろしい。誰のせいでもない。「ふるさと・古平の為にひとりひとりが何かをしなければ——」。そして、おのれは何が出来るのか、と反省させられる。

この良きふるさとの為に、ささやかでもいい、行動すること

~~~~~  
遠い宇宙の知識にくらべ、地球の三分の二を占め、しかもこの身近かある海のこと

外と知られていない。だからこそ海には、未知への興味と壮大なロマンがあるのかも知れない。

「明治二十年一月二十一日、後志国古平郡入舟町の本間

金松なる者、鱈釣漁に出掛けしところ丈八尺五寸（約二・五匁）、肉厚一尺三寸（約四匁）、目方三十貫（約百三十匁）余りあるオヒヨウを釣りしと云う」

（北水協会報告・第十九号）  
こんな大きなオヒヨウがいるのかと本を見たところ、「オヒヨウは、最大二・五匁ぐらい

が大切だと思ふ。進む道はそこに在るはず。  
去年は、あきらめていた鱈もたくさん水揚げされた。宝の海がすぐそこで呼んでるような気がする。  
人間死ぬまで、きらきらと輝いていたものだ。

—— 終わり ——

~~~~~  
ところ、それから七十三年後の昭和三十五年二月二十四日のこと。本間実さん所

有（明栄丸）のカレイ刺し網に、体長二・三匁、百七十匁というオヒヨウがかかり、「これは古平始まって以来の大家」と騒がれた。

オヒヨウの巨大魚の深海

遊漁船をやっている松田清さんは、「昔、カムチャツカ根で漁をしていた時には、身の丈ほどで置一枚ぐらゐのオヒヨウがとれた」といい、また、そこにいた人たちは、「昭和二十年代でも、ダンブルから一人で上げられないような鱈が何匹も釣れた」ともいっていた。

随筆

金蔵さんのこと

古平

(五)

古川 義雄

昭和十年代、小学校の高等科に、一年と二年が同じ教室で学ぶ「は組」と呼ぶクラスがあった。

私がそこに編入された時、上級生に現町議である八木金蔵さんがいた。あだ名が「平ちゃん」の八幡先生が担任であった。忘れられない私の恩師の一人であるが、平ちゃんと金蔵さんは折り合いが良いのやら悪いのやら、

「こらッ金蔵——ッ」と、教室でど鳴られても、金蔵さんは動じるふうもなく、ほっぺたいっぱいに風を入れて、敢然と反抗の態度をあらわにした。私なんかには出来る芸当ではないから、その反骨を大いに尊敬し、感心した。
気づいてみると、八木さんのクラスには、キラ星のように個

性的なすごい先輩たちがいた。

田中岩太郎さん、二木秀雄さん、大高信二さん、上野重次郎さん、竹浪弘さん、小鹿優さん等々、数えればキリが無いが、八木さんに負けない硬骨漢ばかりが揃っていたようだ。

尊敬して止まないもう一つは、なんでこうなるのと聞きたくない程、素晴らしい絵を描いている



たことである。下級生の私たちの作とは天地雲泥の差の、独創性のあるのばかりを先輩たちは描いていた。しかし、氣にくわないことがあれば、山に写生に行つて鯨を一匹描いて堂々と提出する人もいたようだ。

八木さんの作品が、どんなに、
だったか記憶にない。

歳と共に、「は組」の諸先輩は故人も多くなり、忘れた方もいるが、八木さんだけは妙に存在感があり、懐かしい人だ。町のために、いつまでもご活躍を切望している後輩のいることを知ってほしい。

—— 終わり ——

積丹半島へ鉄道敷設を

三

『積丹半島鉄道敷設期成同盟会』が発足する

[昭和10年]

さきに議会に提出された報告書を基に、鉄道敷設の実現を目ざして、町内の有志十六人が発起人となり、期成会設立の趣意書を町内に配布した。

七月二十五日、古平小学校に百二十余人が集まり、満場の拍手の下に期成同盟会の設立と会則を決定し、半島住民の悲願を込めて次のような決議をした。

決議

一、後志国既設鉄道ヨリ古平町ニ通ズル積丹半島東海岸線鉄道ヲ国費ヲ以テ敷設実行ヲ期ス
大正十年七月二十五日
積丹半島鉄道敷設期成同盟会

発起人として名を連ねたのは次の人たちである。

- 今井平五郎、原田吉太郎
 - 大沢吉三郎、高野 平治
 - 高野 常吉、滝原宗四郎
 - 田岸 藤吉、仲谷勇五郎
 - 中村源次郎、山口 金治
 - 山崎 清治、松尾市太郎
 - 藤沢 勇蔵、小林 栄吉
 - 齊藤兼太郎、墓目善次郎
- このあと八月十日、再び同校で百三十余人が集り設立総会が開かれ、会長・副会長・幹事三十人を選出した。

副会長 山口 金治
高野 常吉

この総会での決議をうけて、鉄道省などへの陳情、請願活動が活発に行われ、翌年八月には鉄道省技手による余市・古平間の路線の踏査が行われ、その前途に明かりが差ししてきた。

昔懐かしいお祭りの思い出

本間 銀朔

大正末期の古平琴平神社のお祭りについて、思い出すままに書いてみたいと思います。神社は現在新地町の山の上にあるが、大火の前は新地町と丸山町の地続きにあった。丸山を背にして社務所や本殿があり、境内も広く、そこには今も残っている忠魂碑が建っていた。

招魂祭（今の慰霊祭）になると花火を打ち上げ、銃剣術、相撲などで大変賑わった。花火には紙の旗などが入っていて、空から落ちて来るのを見てはそれを拾いに走ったりした。

琴平神社のお祭りには、神官さんと神社の総代さんが人力車

でが列のお供をし、なかなか格式があつた。当時は鯨漁も良くお祭りは盛大なものだつた。

新地町には劇場があり、町の両側には料亭が数多く並び、お祭りになると軒下にホウズキ提灯を吊し、それに電球がつくと見事なものだつた。

また空地には見せ物小屋がかつた。人形芝居や猿芝居などで、猿芝居を「猿コ芝居」と言つていた。年配の人には懐かしい忠臣蔵の定九郎や、岩見重太

郎のヒヒ退治などが演じられ、ドラや太鼓の音と、見物人の笑い声が外まで聞こえてくる。小屋の前にいる人たちに、時々手前の幕を上げてちよつとだけ中を見せては、外にいる人たちの気持ちを煽るので、子どもたちはなお見たくなる。

これも見たい、あれも買いたい、お祭りの雑踏の中で、僅かの小遣いをぎつしり握りしめて心を躍らせていた。

——つづく——

念願の船入澗完成 学童も参加して旗行列で祝う

【昭和8年】

昭和四年、町議会は三か年計画で、三十七万円余りの予算をもって漁港築設を議会で決議したが、十萬円の起債の許可が遅れ、工出来なかつた。

昭和五年、起債の許可は下りたものの、物価の低落を理由に国からの補助金が大幅に減らされ、設計の変更もあつたがいよいよ着工されることになつた。

この年は暴風雪で漁船が一隻沈没、一隻が座礁破壊、暮れには出漁中の漁船が遭難し、十人が行方不明という海難事故があつた。八月には、豪雨による大被害を出し苦難の年であつた。

しかし、住民の協力や有志からの寄付等もあり、昭和八年八月、四年の歳月と二十九萬五千円の巨費を投じた、住民待望のこの大工事は完成した。

防波堤 二百五十ヤード
防砂堤 五十六ヤード
埋立地 九百三十平方ヤード

十月五日の竣工式当日には、アーチが建つ町内を旗行列が続き、町を挙げての盛大な祝賀行事でその完成を喜んだ。

この船入澗の完成により、昭和四年に十三隻だつたすけそ漁船も冬には六十九隻を数え、その後の沖合漁業を目ざす大型基地としての第一歩が始まつた。

翌九年の鯨漁は好漁であつたが、「鯨の価格の安いことを理由にして、港灣の使用料を払わない漁業者がいる。誠意をもつて率先して払うべきである。」と、当時の議会報告にある。